

時代を読み解く

N検 NEWS
時事能力検定

ニュース時事能力検定
http://www.newskentei.jp/

私の道 娘が開いた

元養護学校校長 語り残す最後の思い

末期がんと告知された人は、残された人生をどう生きるのか。神戸のホスピスで、自分の歩んできた人生を振り返り、思いを言葉で残す「デイグニティー・セラピー」(尊厳療法)に取り組む男性患者の姿があった。新型コロナウイルス禍で家族とも自由に会えない状況のなか、命をどうもし続けている。

末期がんで尊厳療法

神戸アドベンチスト病院(神戸市北区)のホスピス病棟に入院する元養護学校校長、白石充夫さん(70)＝同市西区。2020年11月、別の病院でステージ4の大腸がんと診断され、肝臓にも転移が見つかった。抗がん剤治療を始めたが、嘔吐など激しい副作用に見舞われた。1回の投与だけで治療を拒み、在宅療養に切り替えた。だが、妻の智恵さん(68)らの介護の負担は大きく、21年4月、神戸アドベンチスト病院に入院した。

がん発症前は70あった体重が35に半減。絶望の中で死を待つばかりだったが、同病棟の緩和ケアを通じ、生きる希望を見いだした。その一つが尊厳療法だ。

患者はセラピストの面接を受け、これまでの人生を回顧。大切にしてきたこと、達成できたこと、家族に覚えていてほしいことなどを語っていく。セラピストは聞き取った内容を記録、編集してまとめる。患者と表現などの修正を重ねて完成させた



●病院付牧師の吉田浩行さん(左)と「デイグニティー・セラピー」に取り組む白石充夫さん。隣書院教育一筋だった教師人生を振り返った神戸市北区の神戸アドベンチスト病院、桜井由紀治撮影
●白石さん(左)が41歳、次女の希世子さんが12歳の頃の写真。白石さん提供

文章は、患者からの手紙として家族に読まれる。大切な人にメッセージを残し、自身の人生の意味を見つめた患者は、自己肯定感を高めて人間らしい尊厳を取り戻していく。

6月上旬、白石さんは病床上でセラピーを担当する病院付牧師の吉田浩行さん(55)と向き合った。

白石さんは兵庫県明石市立明石養護学校の校長として定年を迎えるまで、教師生活37年間の全てを養護学校と隣書院学級で過ごし、障害のある児童、生徒

に寄り添った。養護学校では、人工呼吸器を着けた医療的ケア児の担任を自ら手を挙げて務めた。普通学校への転勤の打診を断り続け、どんなに障害が重い子でも受け入れてきた。

「原動力となったのは娘の存在。娘が私を導いてくれた」。白石さんの次女、希世子さん(41)は脳に重い障害がある。生後1カ月で脳腫瘍が見つかり、8度の手術を受けた。左半身まひで自ら体を動かせず、言葉を発することもできなかった。

希世子さんが3歳の頃、地域の子どもたちと一緒に学ばせたいと、受け入れてくれる保育園

を探した。どこも断られた。途方に暮れていた時、児童文学作家、灰谷健次郎さんが神戸市北区に保育園を開くことを新聞で知った。白石さんは希世子さんを連れて講演会の控室に灰谷さんを訪ね、入園希望を訴えた。灰谷さんは「かわいいねえ」と希世子さんを抱き上げ、「うちに来ますか」と言ってくれた。

灰谷さんが私財を投じて1983年に開設した「太陽の子保育園」。希世子さん和其他の子どもたちが、共に学び合い成長していく姿が「灰谷健次郎の保育園日記」で紹介されている。白石さん夫婦と父母との交換日記を基にしたこの著書で、灰谷さんは「この世のなかでなにか美しいといっても、成長しようとするいのちほど美しいものはない」と書いた。

地域の小中学校、養護学校高等部を卒業した希世子さんは19歳の時、寝たきりとなった。兵庫県内の病院に入院して22年になる。娘は自分で手足を動かさないが、私にパワーを与えてくれた」。白石さんはいとおしげに語る。

妻、長女、長男の家族全員の思いも時間をかけて述べ、手紙は6月20日に完成した。A4判で6枚。吉田さんのセラピーは白石さんで27人目になるが、今回が最も長い文章になった。

手紙は家族の心に響き、慰めにもなる。白石さんは旅立った後、主治医で名誉院長の山形謙二さん(74)から家族に渡してもらうよう頼んでいる。

「あなたにとって最も重要な達成は、何でしょうか。何に一番誇りを感じていますか？」
吉田さんの問いかけに、白石さんはゆっくりと語り始めた。

「障害児教育を一貫してやり遂げたことです」

「寄り添う原動力」

「原動力となったのは娘の存在。娘が私を導いてくれた」。白石さんの次女、希世子さん(41)は脳に重い障害がある。生後1カ月で脳腫瘍が見つかり、8度の手術を受けた。左半身まひで自ら体を動かせず、言葉を発することもできなかった。

希世子さんが3歳の頃、地域の子どもたちと一緒に学ばせたいと、受け入れてくれる保育園

約10年前、神戸アドベンチスト病院で尊厳療法を導入したのは山形さんだ。患者は自分の人生は意味ある良いものだったと肯定的に捉え、穏やかな思いを抱く」と効用を説く。自己肯定感を高めた患者は最期まで、生きる意味があるのだと前向きになるといふ。「病院に来た時は絶望しなかったが、もう少し生きられるのではないかと希望が見えてきた」と白石さん。見違えるように気力を充実させた。

一方、新型コロナウイルス禍で家族の面会は制限。事前にPCR検査を受けていない場合、面会は1人限りで1日わずか15分。白石さんは高齢の妻を頻りに外出させるのも心配し、週に1回ほどしか会っていない。

眠れぬ夜は看護婦が話し相手になってくれた。白石さんは自分にも何かできるのでは」と、当事者同士が対話を通じて支援助し合う「ピアカウンセリング」に興味を抱くようになった。

6月28日、白石さんは70歳の誕生日を迎えた。スタッフから「おめでとう」と、花束と色紙いっぱいのお祝い書が贈られ「私は幸せ者」と感激の涙を流した。白石さんは穏やかに、人生の幕を下ろす時を迎えようとしている。

高める自己肯定感

記者はPCR検査を受け、面会許可を受けて取材した。